

【一般口演2】 第7席

『甲乙経』卷七第四の「太陽中風」について

鹿児島 藤木 実

1. 『鍼灸甲乙経』に記載されている穴位主治病症を問題にする目的は二つあります。一つは、診断理解（弁証）に関する事。古典医学の機能的な人体構造論による健康観・疾病観を学ぶこと。具体的な病症を通して、①気血（衛気・営血の生成循環）②形態（五臓六腑・外殻での代謝活動）③経絡（三焦・血脈の循環体系）をキーワードにした病態生理を把握することが一つの目的です。もう一つは、治療方法（鍼灸処方）に関する事。配穴処方（選経・選穴）学の原典『鍼灸甲乙経』にある穴位方意を考えることで、現在の治療道具・手段・方法の運用規則や適応範囲の可能性を模索することです。

2. 『鍼灸甲乙経』卷之七第四には、「剛瘧」についての定義があります。[今本缺]「然剛瘧、太陽中風感於寒湿者也。其脈往来進退以沈遲細。異傷寒熱病。其治不宜發汗、鍼灸為嘉。治之以藥者、可服葛根湯」現行『傷寒雜病論』にはない条文です。しかも鍼灸適応病態とされています。

3. 「太陽病」：脈浮、頭項強痛而惡寒。

「太陽中風」：發熱、汗出、惡風、脈緩。

「剛瘧」：太陽病、發熱、無汗、惡寒。

「柔瘧」：太陽病、發熱、汗出、不惡寒。

4. 「太陽中風」：風邪は肌の衛分につく。肺虚。

「傷寒」：皮の衛分が病位→寒邪は皮の衛分を外束する。

「中湿」：肌の衛分が病位→湿邪は肌の衛分につく。

「強（こわばり）・攣急（ひきつり）・瘧」：営虚→筋・肉が乾いて固くなる。「腫れて痛んで發熱」：肌の衛気が集中して熱→肌絡への熱の波及

5. 以上、『甲乙経』に記載されている穴位主治病症について考察します。